

早稲田大学博士論文(概要)		
	学位記	文科省報告
2012	6129	乙2373

論文概要書

美術館展示教育に関する研究

山田 磯 夫

「博物館冬の時代」といわれて久しい。博物館を取り巻く環境に改善の兆しが見えず、財政難を核心とした博物館の窮状を察して余りあるが、学芸員養成に携わるものとしては、一人でも多くの有能な学芸員を育てることが春を迎える原動力になるのだと信じている。

これまで、展示を具体的に分析し教育に生かす研究はもとより、学芸員養成に関する研究もなかった。それだけに、展示および展覧会をどのように教育していくかを研究する必要性を感じ、学芸員養成において展示を扱う博物館展示論と博物館実習の二科目に注目し、展覧会企画論、展示の模擬的体験法や展覧会から展示意図を読み取る方法などを具体的に提言してきたのである。

本博士学位請求論文は学芸員養成において美術館を中心として展示を教育する方法についての研究成果をまとめたものである。

序章 日本博物館前史

ヨーロッパの博物館の思想が明治時代に輸入される以前にあったわが国の博物館の機能に関して論じたもので、特に現代の博物館展示と比べても遜色のない展示および展覧会がすでに江戸時代にあったことを指摘した。

明治時代以前の博物館がなかった時代に、今日の博物館の機能である収集、保管、展示、調査研究に準ずる事柄を画像・目録や文献等の記録から探し出し、再評価した。具体的には天平19年の『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』をとおして奈良時代の法隆寺金堂の展示、天平勝宝8年の『国家珍宝帳』をとおして東大寺献納宝物の収集と保管、江戸時代の書画会と展覧会に関する資料をとおして展示および展覧会、天明5年の『泉涌寺霊宝拝見図』と文政2年の『嵯峨霊仏開帳志』をとおして出開帳の展示および展覧会を扱い、これまでの博物館前史では語られることのなかった博物館に準ずる機能について論じた。

特に、江戸時代においては、さまざまな記録によりこれまでの博物館前史で持たれてきた認識を大いに変える出開帳や展覧会がおこなわれていたことがわかった。さらにそれ以前においても種々の目録により、展示や収集などの博物館の機能が垣間見えている。

この論考では博物館機能に関する記録とその内容の再現を目的としたが、ここには西洋の博物館とは異なるわが国独自の博物館の機能、とりわけ展示の原点があったのである。

第一部 展覧会および展示教育の研究

展示教育に関わる具体的な方法について提言した。

平成 21 年 4 月 30 日公布の「博物館法施行規則の一部を改正する省令」（文部科学省令第 22 号）において、「博物館に関する科目」に「博物館展示論」が新たに設置された。この科目は「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」が平成 21 年 2 月に『学芸員養成の充実方策について』（第 2 次報告書）において提案したもので、「大学における学芸員養成科目の改善」によれば、「展示の諸形態等に関する理論及び方法に関する知識・技術を習得し、博物館の展示機能に関する基礎的能力を養う」、「展示の制作（企画、デザイン、技術、施工等）」とあって、展示にかかわる理論と方法に関する知識・技術の習得を説いている。

一方、以前からある博物館実習 [3 単位] も「内容」が学内実習（見学実習、実務実習、事前・事後指導）と館園実習（博物館における実務体験）に定められ、展示は学内での実務実習でもおこなうことになった。博物館法改正以前は博物館に出向いて実習を受ける際に展示をおこなうことになっていたから大きな転換であり、同時に展示に関する授業は学内でおこなうことになったので、大学の負担は重くなっている。実務実習で展示をおこなうには、学内に博物館があれば難しいことではないが、博物館を設置していない多くの大学は、実務実習をおこなうための工夫が必要になる。

このようなカリキュラムの変更のなかで、博物館展示論は実務を背景とした科目だけにこれまで以上に研究されなければならない、実践的な能力を持つ学芸員を育てるには、その教授法についても具体性のある内容が求められるのである。

また、博物館展示論の市販のテキストでは展示施工業者による歴史系、科学系、自然史系等博物館の据え付けられた常設展示について論じることが多い。これは展示形態や新しい技術を知る上で重要ではあるが、展示を語ることはできるようになっても、展示をおこなえるようにはならない。しかも、開館時に学芸員が常設展示に関われるのは設計の段階で、「何を展示するか」を検討することはできても、具体的に「どのように展示するのか」は業者任せになることが多い。最終段階で学芸員が展示するにしても指定された場所に決まった方法でおこなうことが求められるから、真に学芸員が作った展示といえるのだろうか。したがって、据え付けの常設展示を学んでも展示ができるようになる訳ではないから、学芸員が展覧会を企画し、自ら展示をおこなえるようになるには、これとは別の学習と、さらには経験が必要になる。

そこで、私は以前から学芸員養成に携わるなかで博物館展示論に興味を持ち、とりわけ講義において展示や展覧会企画を具体的に学習させ、模擬的に展示を経験させる方法を研究してきた。これは講義において展示を学ぶには、展示理論に加え経験が必要だと考えたからである。

ここでいう経験は模擬的なものだが、展示に関する体験ができ、展示への興味を引き出すことができる現実感を生み出すために、さまざまな手法を研究してきたのである。

第一部では特に美術館の展覧会を対象として論じていきたい。なぜ美術館かといえば、展示設備や展示資料がシンプルだからである。また、同じく人文系の歴史博物館の常設展示室が主に展示施工業者による固定的なシステムのため複雑なのに対し、美術館は常設・特別展示室ともに固定的ないわゆる「作り物」がほとんどなく、展示替えごとにテーマに合わせて刷新されるから学芸員の展示意図が直接表れる。特別展示室で展示をおこなえば歴史系博物館でも同様の効果を期待できるが、美術館で扱う絵画・彫刻・工芸は平面・立体（映像もあるがここでは除外）というように形が単純化できるので、展示の基本を学ぶには都合がよい。

とはいえここで論じる内容は歴史系博物館の常設展示にも十分応用できると考えている。

第一章 博物館施設の見学

学内実習でおこなわれる見学実習に関するもので、博物館で何を見るかについて具体的に整理し、その効果と問題点に関して述べる。

博物館施設の見学は、「博物館に関する科目」の諸講義の内容を現場で具体的に確認し、理解を深めるためのものであり、展示室の構造やバックヤードの設備を実見することで展覧会の仕組みや博物館そのものを学ぶ機会となる。また、種々の博物館を見学することによって、地域ごとに多彩な博物館文化があり、博物館によってそれぞれに内情が異なっていて多様な考え方があることを知るので、たがいのよいところを比較し理解するよい機会となる。

見学の要点を、建物と環境・展示室・展示室以外の公開施設・バックヤード（非公開施設）の4つの大項目に分け、さらに小項目に分けて提言した。博物館学は実学なので、有益な博物館見学は学芸員を養成する上で必要不可欠なものであり、見学後の話し合いを通じてさらに教育効果を高められることを指摘した。

第二章 展覧会企画と展示平面図の作成

机上でおこなう展覧会企画をより現実感のあるものにするために、展覧会企画、作品リスト、展示平面図を組み合わせておこなう方法について検討する。

大学の授業内で展覧会を企画をする場合、一般的に文章で企画書をつくることが多く、さらにはスケッチやイラストでの立案もあると聞く。いずれも、博物館での展覧会企画の流れから見れば最初期におこなうラフスケッチで、そこから実際の展示を行うまでには乗り越えなけ

ればならないハードルがたくさんある。本章で扱う展覧会企画はいくつものハードルを越えて実際に展覧会が開けるレベルの最終案を想定したもので、企画内容はもちろんのこと、所有者がわかっている借用が可能な作品のリスト、1/50のスケールで描いた展示平面図を組み合わせることで現実感のあるものに仕上げる。現実感の要点は実際の展覧会企画でも起こりうるハードルを設置することで、具体的には所有者がわからなければ借りられず、寸法がわからなければ展示できないという約束事である。学生はその都度シナリオと作品リストの再検討をしなければならなくなる。この作業をとおして博物館の企画展の成り立ちを理解し、日頃から展示を注意深く観察することの重要性を知ることになるのである。この方法は講評や議論と組み合わせることにより、机上で展覧会を具体的に考えることができることを指摘した。

第三章 美術館展示計画と展示設計図

第二章の内容から展覧会企画を除いて展示平面図と立面図に特化させたもので、展示に関わる具体的な事柄を考えさせる方法として提言した。

特別展での展示を企画する際、展覧会の目的に沿って展示計画を立て、それを現実のものとするために一般に展示設計図を作成する。これは展示室の平面図に展示資料・作品や展示ケース、移動壁、仮設壁、造りもの（造形）等の配置を描き入れ、設置・施工業者や学芸員が展示のよりどころとするためである。したがって、ここには展示にかかわる諸情報が描き入れられており、数値や注意事項、時には照度や展示法など展示上の条件に及ぶこともある。この時、どのように見せたいか、どのように見て欲しいかという、学芸員の展示意図も図示されることになる。この展示にかかわる実践的諸情報を考えることが、展示設計図を描く目的である。

第二章との違いは、学生は企画を作らず、より規模の大きい展示会場を想定した展覧会の一展示室だけを担当させるもので、作品リスト・図面に貼付する作品の1/50縮小写真・1/50平面図・1/50立面図を提供し、これらをもとに、展示作品を図面上に構成・配置する。オリジナルの企画案を作らず、写真を用いるので、より短時間に作成でき、かつ具体的に展示を経験し、特に鑑賞空間と立面図による視線計画を意識させられるので、高いレベルの現実感を生み出すことができることを指摘した。

第四章 展覧会企画のプレゼンテーション

展覧会企画に関してコンピュータを用いてプレゼンテーションするための方法を提言した。

第二・三章では、私は学生に対して机上での展覧会をいかに現実感を持たせて仮想体験させ

るかについて論じてきた。これらに次いで本章では作成した展覧会企画や展示平面図を、コンピュータを用いてプレゼンテーションする。

このプレゼンテーションでは学生個人が展覧会企画での経験を生かし、企画書・作品解説・展示平面図を作って発表をすることで、コンピュータ操作の経験と、プレゼンテーション技法を学ぶことができることを指摘した。

第五章 仮想展覧会の開催

仮想展覧会と称して、展覧会企画・作品リスト・展示平面図に加え、展示・図録・チラシ・ポスター作成に至るまでのすべてを実体験するもので、その工程と内容について提言した。

美術館の学芸員が展覧会を開催するのと同じように、学生が授業の中で企画し、図録を作成し、原寸大の複製作品を展示して展覧会を開催するというもので、学芸員が作る展覧会と違う点は展示された作品が本物ではないというところだけである。

一つの展覧会を立ち上げ開催することは美術館の学芸員にとって重要な仕事である。この仕事を学芸員と同じように模擬的に体験するのだから、仮想展覧会は美術館の仕事を理解するのに実践的で有意義な手段といえる。仮想展覧会の開催によって学生は展覧会を作り手の視点から見ることを学ぶが、さらに作品研究のための調査法や図録の編集法なども学ぶことができた。仮想展覧会の実施は総合的な教育の場になりうることを指摘した。

第六章 博物館実習における展示について

博物館の展示室で実物資料を用いておこなう展示実習について論じた。

博物館実習のカリキュラム構成のなかで展示実習を後半に設定し、展示のために最低限必要な知識と技術を事前に身につけたうえで、これらが展示実習に集約されるように位置づけた。展示理論、照明と照度、展示計画（図面、企画）などの講義、資料取り扱い、展示法、写真撮影、キャプション作成をおこなって展示実習に備えた。

作業は掃除に始まり、資料の選定、展示資料の配置決め、展示台を選ぶ、展示する、向きや角度を決める、全体のバランスを調整する、見やすさを意識する、ゴミや塵に注意を払う、キャプションを設置するなど、これらすべてを経てようやく展示は完成する。撤収では資料を元に戻し、展示台を片付け、展示ケース内とガラス面を掃除して終わる。

展示はただ並べれば良い訳ではないから、事前の展示環境の整備や知識と技術の習得、作業中では作業手順の指示やアドバイス、事後の講評や評価などが重要であることを具体例と共に

指摘した。

第二部 展示形態と展示意図の研究

展覧会の展示における学芸員の展示意図について探究した。

「意図なき展示はありえない」、「意図なき展示は羅列と呼称」という主張は博物館展示の必要条件として展示意図の存在が認められていることを示している。いつからか断言しかねるが、学芸員の展示意図を具体化したわかりやすい展示法が試みられ現在に至っているのである。美術館では「羅列」でなく「展示」をおこなっているから、そこには必ず展示意図があり、意図に沿って動線が作られる。

展示意図はあくまで学芸員からの視点で語られるものだが、意図のある展示は利用者から見た場合でも当然見やすく、学芸員からのメッセージは伝わりやすい。

観客が動線を尋ねると「自由に見てください」と答える美術館がある一方で、監視員が動線を説明しようとする「自由に見たい」という観客もいる。観客が自由に見るか否かは文字どおり自由なので、美術館が自由に見て欲しいと思うのもおそらく自由なのだろう。しかし、美術館の学芸員は気ままに作品を羅列している訳ではなく、どのように見せるかを考えて展示している。その見せ方はストーリー性、色・形・大きさなどのバランス、作品の重要度、施設の都合などによって変わる。この「どのように見せるか」が展示意図である。

したがって、私はこのような展示意図を美術館の展示から読み取る訓練は学芸員を目指す学生にとって必要なことであると考えている。なぜそのような展示になったかを読み取ることによって、展示をした学芸員の考え方や展示の組み立て方を学ぶことができるからである。

第一章 博物館における展示形態の再検討

博物館の説示型展示・提示型展示・教育型展示といわれる展示形態と展示意図との関わりについての再評価と新たな定義について論じた。

博物館学黎明期から様々な展示形態が提唱・実施され、利用者にとって見やすく、理解しやすい形態が理論化されてきたが、なかでも提示型展示・説示型展示に発展する理論は最も早くから論じられ、展示の基本に据えられるものとして評価されてきた。

提示型展示は視覚による理解を重視し、美的感性で資料（作品）を鑑賞して楽しみや心の豊かさを得る感性型の展示形態、説示型展示は資料が持つ学術情報に対する理解度を高め知識を

深める思考型の展示形態と理解される。問題となるのはこれら二つの展示形態をどのような視点で分類するかであり、かつては「展示の意図による分類」とされたが、新しくは「資料の基本的性格による分類」との説が提出された。私は、「資料の基本的性格による分類」は成立しないことを論証し、「展示の意図による分類」を再評価した。

また、「展示の意図による分類」に含まれる教育型展示に関しては、これまで明確な定義がなかったので、しばしばいわれる子ども向けの展示形態ではなく、豊田市美術館高橋節郎館の漆塗りの工程や東京国立博物館「文化財を守る―保存と修理」のように、一般の疑問に答え、啓発する展示も含めて考えられる展示形態であることを指摘した。

第二章 美術館の展示意図 I 「ザ・コレクション・ヴィンタートゥール スイス発―知られざるヨーロッパ・モダンの殿堂」から

同一企画の巡回展を開催する複数の展覧会場での調査をもとに、展示を分析することにより、展示への評価と展示意図を読み取る方法について提言した。

私はこれまで学芸員の展示意図について論じ、それを実際に読み取ることの重要性を説いてきた。本博士学位請求論文はその具体的な例として実際の展覧会に注目し、同一作品を扱いながら異なる学芸員と環境のなかでおこなわれる巡回展を取り上げ、学芸員の展示を具体的に比較し、展示意図を検討した。

展示は展示室の設備と構造、美術館の展示方針、作品そのものなどによって変わるから、同じ展示内容の展覧会であっても美術館が異なれば、自ずと展示に反映する。そこで、これらを理解するために必要な、なぜこのように展示したかという理由を探っていく。これにより、学芸員を目指す学生に対し、展示を学ぶ方法の一例を示すことになる。また、同時に美術館の展示がいかにか工夫され、学芸員の熟慮によって組み立てられているかを理解できるのではないかと考えている。

そこで、2010年度開催の特別展から「ザ・コレクション・ヴィンタートゥール スイス発―知られざるヨーロッパ・モダンの殿堂」を選んだ。この展覧会はスイスのヴィンタートゥール美術館の名品展で、兵庫県立美術館が統括し、宇都宮美術館を皮切りに、世田谷美術館、兵庫県立美術館、長崎県美術館の順に巡回した。宇都宮美術館、兵庫県立美術館、長崎県美術館が美術館の白い壁面やランニングウォールをそのまま生かすホワイトキューブと呼ばれる現代的な空間を生かした展示を志向したのに対し、世田谷美術館は仮設壁面に色つきの壁紙を用いてオールドマスター型の展示を志向して、その個性が際立っていた。ほかにも観客の誘導法、

配置順、見せ方、展示意図などの違いが見られた。

第三章 美術館の展示意図Ⅱ『没後 120 年 ゴッホ展 こうして私はゴッホになった』から

第二章とおなじく、複数の展覧会場での調査をもとに展示を分析するとともに、展示への評価と展示意図を読み取る方法について提言した。

取り上げた「没後 120 年 ゴッホ展」は 2010 年～2011 年、名古屋市美術館が企画の中心となり国立新美術館を皮切りに、九州国立博物館、名古屋市美術館の順に巡回した。設立目的から施設規模に至るまでまったく異なる三館の個性がはっきりみえていた。

具体的には第二章の比較項目に加え、企画の趣旨への解釈、展示施設の大きさや設備、企画への思い入れなどの違いと問題点、実物大復元模型の扱い方への疑問を指摘した。

第四章 展示意図への提言

第二部のまとめとして展覧会や展示から展示意図を読み取る方法について提言した。

どのように見せるか、何を伝えるかなど、意図を持って展示することは学芸員にとって当たり前のことで、日常おこなっていることである。その意図の表し方は展示シナリオ、作品の性格、バランスと見栄え、学芸員の感性などによって、さらに展示室の施設上の制約、各美術館独特の方針や事情などにより形作られる。これらを少しずつ読み取る訓練を重ねることで、展示にかかわる知識やアイデアが増えていく。とはいえ、展示の中には意図の見えにくいことがあるし、動線が混乱していることもよくある。学芸員を目指す学生はこれらのことを踏まえ、よい展示を研究し自分のものにしてほしいと思う。

展示意図を読むために、「動線を読む」・「展示意図を読む」の二項目をとおして考察を試みた。具体的には、前項では展示室の形状・作品リストの記載順・キャプションの位置とデザインから動線を読む方法を、後項では重要作品の配置・展示室と作品の位置・壁面と展示などから展示意図を読む方法を指摘した。

大学を卒業したばかりの学芸員に即戦力を求めることは酷であるが、少しでも実践的な能力を備えた学芸員を育てることが、学芸員養成を担う大学の使命である。そのために何をすべきかという視点から、「博物館に関する科目」のなかの展示実務を背景とした博物館展示論と博物館実習の二科目に注目し、展示の教育法について研究した。そのささやかな成果として、模擬的ながら展示経験を重ねることで展示スキルを高め、さらに展示の現場をテキストとして

自ら学ぶ方法について具体的に提言したのである。これらをおこなうことだけで、良い学芸員を育てられると考えるほど学芸員養成は簡単ではないが、この展示教育の研究を第一歩とし、さらに学芸員養成について考察していきたい。